

# 分娩事故・発情見逃し ゼロへの挑戦!

モバイル牛温恵の活用で



## 農場の概要

事例にあげる農場は、繁殖母牛約50頭の家族経営の繁殖農場である。分娩間隔は約380日、直近1〜2年で流死産がほぼ発生していない優良生産者である。2009年に分娩事故が発生したことをきっかけに、分娩監視システム「モバイル牛温恵」の導入を決定した。当初20頭だった飼養規模を50頭まで増頭し、現在の飼養規模に対して3セットのセンサーを活用して分娩に立ち会えるようにしている。

この農場は、分娩牛舎とそれ以外の牛舎が離れており、また他の作業もあるため常に分娩間近の牛の傍らにいないことができない。そこで、離れていても分娩兆候を察知することができる牛温恵を重要としているという。

## 牛温恵の具体的な活用法

使い方は、分娩予定日の3日前から膣内にセンサー（写真1）を挿入し、留置させる（写真2）。これにより24時間体制で牛ごとに異なる体温変化の推移を監視できる。体温は1日単位で変動しており、分娩の約24時間前になると、分娩時特有の体温変化が表れ「段取り通報」メールが携帯電話へ届く。さらに破水によりセンサーが体外へ出されることによる「駆け付け通報」メールも届くようになってくる。

センサーの挿入は、初妊牛や暴れる牛以外は慣

れれば容易とのこと。抜けることも少なく、仮に抜けたとしても温度センサーの動きですぐに察知することができる。センサー挿入がストレスとなり、分娩に悪影響を与えたとされる様子もない。牛温恵を導入して5年目となり、通報を受けた後のお産の準備も効率的に行えるようになった。また、牛ごとの体温変化の特徴を把握する（写真3）など使い手の技術向上も、システムを有効活用できている要因である。

## 分娩立会いが100%になった

温度センサーやシステムの信頼性は高く、「段取り通報」「駆け付け通報」とともに必ずメール連絡が来る。システム導入から分娩立会いを逃したことはなく、分娩事故も発生していない。

牛温恵導入による利点は大きく分けて2つある。1つ目は、難産や育児放棄といった分娩に立ち会ってさえいれなかった事故が、確実になくなることである。2つ目は、分娩予定日を過ぎた牛に対して、何度もお産の準備をする必要がなくなり、無駄な労力や心労がなくなったことである。特に稲わらの集荷などの繁忙時期には非常に助かるようだ。中規模・家族経営の場合など、牛舎に常に人がいるわけではない農場にと

分娩は繁殖農家にとって最も重要な部分であり、同時に最もリスクのある部分でもある。今回はIT技術を活用した「モバイル牛温恵」を導入し、確実に分娩立会いが可能となり事故率の大幅な低下を実現した事例を紹介する。

所在地：関東地方 飼養頭数：和牛繁殖牛50頭 従業員数：2名

って、必要なアイテムであると感じている。

また、「段取り通報」や「駆け付け通報」の情報がありながら、分娩の兆候がみられないことがある。その場合、逆子などが考えられるため触診を行っている。ただし、分娩に確実に立ち会えるようになった現在でも、以前と変わらずお産前の牛の様子には注意を払っている。分娩事故は経済的な損失以上に精神的な負担が大きいためだ。「どれだけ経験を積んでもこの怖さがなくなることはないだろう」と農場主は話す。

それをわかった上で人事を尽くしていくことが、繁殖牛経営にとって重要なのだろう。



写真1. 牛温恵センサー



写真3. 通報メールだけでなく、体温の変化についてもスマートフォンで監視できる



写真2. 牛温恵センサーを留置している牛

※牛温恵の仕組みについては12ページ参照